第１章　津島岡大遺跡の調査研究

第１節　発掘調査の概要

１．津島岡大遺跡第30次調査（インキュベーション施設新営工事、津島BC19・20区）

⑴　調査の成果

本調査区は、津島南地区の西側に位置する。今回の調査により、縄文時代後期から近世・近代にいたるまでの遺構が確認され、津島地区の西側における遺跡の内容を知る手がかりが得られた。

特筆すべき成果に、古代の条里制の地割に合致した、区画を明示する遺構を確認したことがあげられる。本調査地点は、岡山平野における条里地割のなかでは、里境および坪境にあたる地点である。発掘調査によって確認した条里遺構は、岡山平野における条里の復原の際に基準の一つとなるものである。また、道路状遺構としての区画が確認されたことの意義も大きい。さらに今回の調査地点では三叉路状の区画を確認したが、三叉路の連接点より南に向かう区画が認められなかったことは、坪境の区画を何らかの施設によって必ずしも明示する必要がなかった可能性も示しており、区画の表示の仕方とあわせ、今後検討すべき課題となろう。本調査区で確認した東西区画は、古代には道路状遺構であったが、近世・近代には溝となる。区画表示の在り方は変化するものの、古代の段階に整えられた地割は、その後もほぼそのままの位置で踏襲され続ける。本調査区での確認例は、古代の段階の区画が近世・近代までたどれることを示すものであり、岡山平野における条里制の施行が平安時代に遡ることを示す実例の一つとなった。

調査期間　2007（平成20）年８月１日～12月17日

調査担当　野崎貴博（主任）・池田　晋

調査面積　1,035.4㎡

遺構・遺物

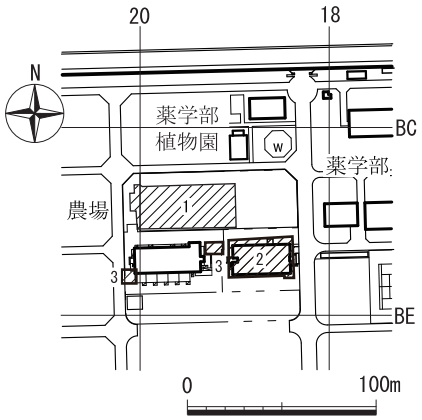
【遺構】　縄文時代後期：土坑・ピット・焼土集中、弥生～古墳時代後期：溝
古代：道路状遺構（条里関連）、中世：耕作痕、近世・近代：溝・水門・土坑

【遺物】　縄文時代：縄文土器・石器、弥生：突帯文土器・石器、古墳：須恵器

⑵　調査地点の位置

本調査地点は津島南地区西半、津島地区に設定した構内座標ではBC19・20区に位置する（図１）。津島地区における発掘調査ではもっとも西側に位置する調査区の一つとなり、津島岡大遺跡の西側の状況や、遺跡のひろがりを面的に確認するうえで重要な位置にある。

本調査地点周辺では、南側に位置する遺伝子実験施設・動物実験棟の建設に先立って発掘調査を実施している（遺伝子実験施設：津島岡大遺跡第８次調査、動物実験棟：同第16次調査）。また、新営予定地の東約200ｍの地点では、事務局本部棟、創立五十周年記念館の建設に先立つ発掘調査を実施している（事務局本部棟：同第26次調査、創



1：本調査地点
2：第８次調査（遺伝子実験施設）
3：第16次調査（動物実験棟）

図１　調査地点（縮尺１/4,000）

立五十周年記念館：同第27次調査）。事務局本部棟の調査では近世・近代の東西方向の条里の区画溝が確認されている。本調査区はその西側延長線上にあたるため、条里の区画が確認されることを予測して調査を進めた。

⑶　調査に至る経緯と経過

ａ．調査に至る経緯

2007年、岡山大学津島地区にインキュベーション施設の新設が計画され、施設の新営予定地として津島南地区西半に位置する薬学部棟西側の区画が割り当てられた。予定地周辺ではこれまでにも発掘調査を実施しており、その成果から、①縄文時代後期には微高地が広がり、その間に南北方向の低地が通る地形が展開すること、②遺構・遺物の密度は高くないものの、縄文時代後期から近世にいたるまでの各時期にわたる遺構・遺物が分布すること、が予測された。そこで施設の建設に先立ち、発掘調査を実施することとした。なお、当地点における包含層の厚みおよび遺構・遺物の有無については、これまでの周辺の発掘調査により概要が推察されたため、試掘・確認調査は実施しなかった。

ｂ．調査の経過

発掘調査に先立ち、７月23～30日の期間で近・現代の造成土と近代の耕作土を除去した。その際、旧陸軍歩兵第十聯隊兵舎建物の基礎を確認した。

発掘調査は８月１日より開始した。近代層下では水門を伴う条里の区画溝と土坑群、耕作地内に掘削された小溝群を検出した。以降、近世、中世から古代へと遡りながら耕作地の調査を進めた。この間、近世の耕作面においては土坑群や耕作痕、中世の耕作面においては鋤溝と考えられる耕作痕を確認した。中世層の調査を終了した10月中旬になり、調査区西半において、ほぼ正方位に合致する南北方向、東西方向の溝を検出した。これらは２条の溝が対になるかたちで検出されたため、道路状遺構である可能性を念頭に調査を進めた。その結果、２条の東西溝群のうち、北側の溝が直角に折れて南北方向の溝に連続し、「Ｌ字」、「逆Ｌ字」の鉤形の溝となることが明らかとなった。これに対し、南側の東西溝については、分流や屈曲がなく、東西区画から南に向かう道路や溝は派生しなかった。最終的に、対になる溝に挟まれた高まりで構成される道路状遺構と東西・南北の道路が連接した三叉路部分を確認することとなった。なお、11月19～29日の期間で、古代の遺構の調査成果を公開した。

調査区北辺では、古代の道路状遺構と同じ検出面で東西方向に掘削された溝群を検出した。これらの溝群は出土した土器や土層から、弥生～古墳時代後期の溝群であると考えられる。

その後、縄文時代後期の基盤層である12層での調査をすべて終了した段階で本調査を終了した。なお、調査終了後、2007年12月18日に愛媛大学田崎博之氏、宮崎大学宇田津徹朗氏による土壌サンプル採取を実施した。

⑷　調査の概要

ａ．層序と地形

層序（図２）

本調査区で確認された土層は大きく12層に大別される。以下に各層の概要を記載する。

１層：1907（明治40）年に旧日本陸軍が第十七師団駐屯地を造成した際の造成土を主体とし、以降、現在に至るまでの造成土である。明治期の造成土は明黄橙褐色花崗岩バイラン土の真砂土を主体とする。現地表面の標高は約3.8mである。

２層：灰色砂質土で、1907年までの近代耕作土である。径１～５mm程度の礫を多く含む。層下半では管状に鉄分の凝集がみとめられる。上面の標高は約2.9～3.0mである。

３層：明橙褐色砂質土である。上面に鉄分の沈着がみとめられる。近世の土層である。上面の標高は約2.75～2.9mである。

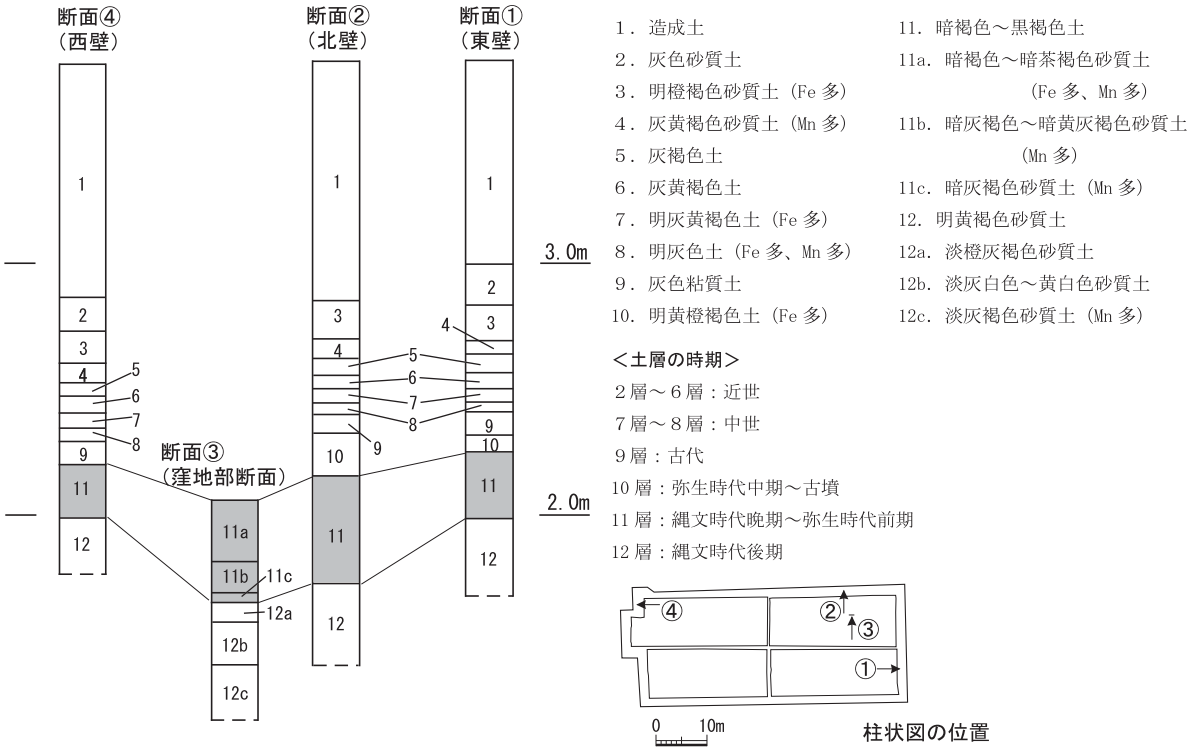


図２　土層柱状図と柱状図の位置（縮尺１/30）

４層：灰黄褐色砂質土である。マンガンの集積が顕著にみとめられる。近世層と考えられる。上面の標高は約2.6～2.7mである。

５層：灰褐色土である。近世層と考えられる。上面の標高は約2.55～2.65mである。

６層：灰黄褐色土である。近世層と考えられる。上面の標高は約2.5～2.55mである。

７層：明灰黄褐色土である。中世層と考えられる。上面の標高は約2.4～2.5mである。

８層：明灰色粘土である。鋤溝とみられる耕作痕多数を確認した。上面で亀山焼の破片が出土しており、中世の土層とみられる。鉄分の沈着、マンガンの集積が顕著にみとめられる。上面の標高は約2.35～2.45mである。

９層：灰色粘質土である。古代の堆積層と考えられる。上面の標高は約2.3～2.4mである。

10層：明黄橙褐色土である。調査区東半の窪地部に堆積した土層である。弥生時代の堆積層と考えられる。上面で弥生時代から古墳時代後期の溝を検出した。上面の標高は約2.3mである。

11層：暗褐色～黒褐色土である。マンガンの集積が顕著にみとめられる。津島地区では「黒色土」と呼称している鍵層で、上面が弥生時代前期の土層である。窪地部では11層が厚く堆積しており、細分が可能であった。上面の標高は約2.1～2.25mである。

11a層は暗褐色～暗茶褐色砂質土である。鉄分の沈着、マンガンの集積が著しい。突帯文土器を多く含む層である。窪地部最深部における上面の標高は約2.1mである。11b層は暗灰褐色～暗黄灰褐色砂質土である。鉄分は少ないが、マンガンの集積が著しい。明黄褐色砂質土ブロックを含む漸移的な層である。窪地部最深部における上面の標高は約1.85mである。11c層は暗灰褐色砂質土である。マンガンの集積が著しい。上層より色調が淡くなる漸移的な層である。窪地部最深部における上面の標高は約1.75mである。

12層：明黄褐色砂質土である。縄文時代後期の基盤層である。上面で縄文時代後期以降の遺構を検出している。上面の標高は約1.7～2.0mである。

12a層は淡橙灰褐色砂質土である。暗褐色土ブロックを含む漸移的な層である。窪地部最深部における上面の標高は約1.7mである。12b層は淡灰白色～黄白色砂質土である。マンガンの集積がみられる。窪地部最深部における上面の標高は約1.6mである。12c層は淡灰褐色砂質土である。マンガンの集積が顕著にみられる。窪地部最深部における上面の標高は約1.4mである。

地形

縄文時代後期には調査区東半において幅約16mの浅い窪地がほぼ南北方向にのびる。窪地の東西に広がる微高地との比高は約0.5mである。法面は西斜面の傾斜が強く、東斜面は緩やかに下がる傾斜となっている。この窪地は弥生時代前期までの間に埋没が進行するが、弥生時代前期段階にもわずかな窪みがのこっている（11層上面段階）。古墳時代後期以降になると、各層の上面の標高は0.1m前後におさまり、ほぼ平坦な地形となっている。

ｂ．遺構と遺物

縄文時代、弥生～古墳時代後期、古代、中世、近世の遺構・遺物を検出した。

縄文時代（図３）

本時代の遺構と考えられるものは、12層検出の土坑９基、ピット12基のほか、焼土集中がある。遺構の分布密度は低く、散在している状態である。また、調査区の東半でほぼ南北方向にのびる窪地状の地形を確認した。

検出した土坑には、長楕円形を呈する長軸長約1.1～２mの大型のもの、平面円形を呈し、径約0.5～0.75mのものがある。これらの土坑は深さ約0.1～0.3m前後の浅いものである。埋土には褐色系のものと、明黄褐色系のものがあるが、窪地部を境に、西に褐色系埋土の土坑が、東に明黄褐色系埋土の土坑が展開している。褐色系埋土の土坑には上層から掘り込まれたものが含まれる可能性もあり、これについては今後の整理作業において検討を加える予定である。ピットは調査区北半中央部で、窪地部への落ち際付近に集中する傾向を示す。これ以外の地点のピットは単独で検出され、有機的な関係性はとらえがたい。焼土集中は窪地部東斜面で検出された。このうち、焼土と大型の炭化材を多量に含む遺構は、検出面よりも下位の断ち割り内で多量の炭化物や焼土を確認した。平面的には明瞭に検出することができなかったが、浅い掘りこみをともなうものであった可能性がある。この東には焼土・炭が集中して散布している状況が確認できた。

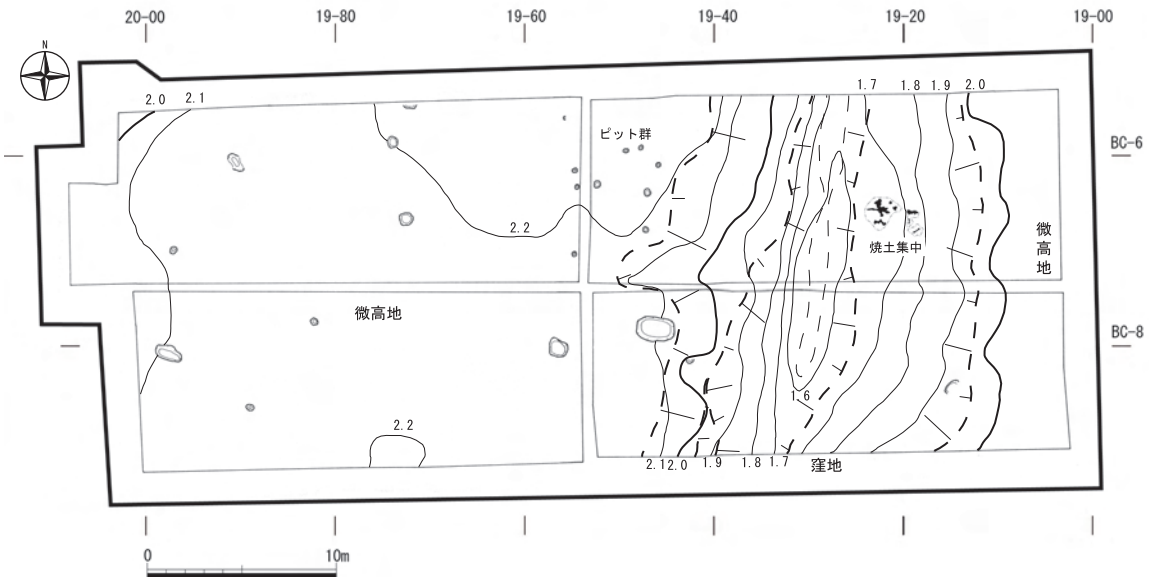


図３　縄文時代遺構全体図（縮尺１/400）

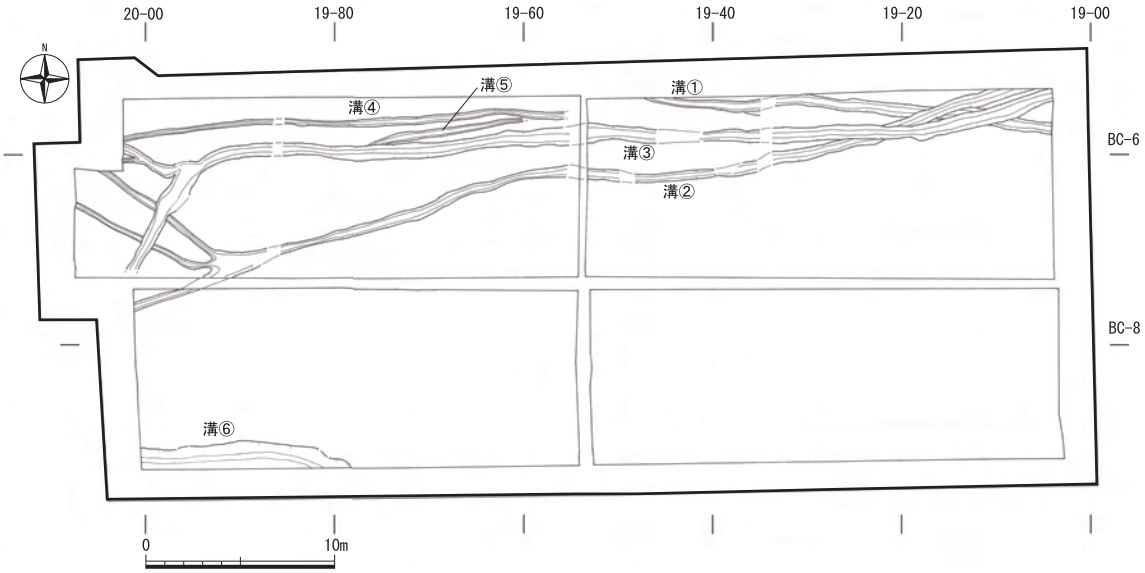


図４　弥生時代～古墳時代後期遺構全体図（縮尺１/400）

弥生時代～古墳時代後期（図４）

本時期の遺構として、調査区の北辺を東北東－西南西に走向する溝群（溝①～⑤）および調査区南東で東西方向の溝１条(溝⑥)を検出した。これらの遺構は調査区西半では11層上面で、調査区東半では10層上面で検出した。

これらのうち、北辺の溝群のすべての溝を切る溝③からは古墳時代後期の須恵器が出土しており、調査区北辺の溝群の下限を示す。そのほかの溝については、時期を示す遺物が出土していないため、確実な時期を示せないが、いずれの溝も上面が弥生時代前期に該当すると考えられる11層（「黒色土」）を掘削しており、弥生時代前期を上限とするものである。

溝の勾配はいずれも緩いものであり、溝底面の起伏を考え合わせれば、大きな勾配を有するものは無い。わずかな底面高の差に注目するならば、溝③は東から西にわずかな勾配をもって下がり、溝①、②、⑥では西から東に緩い勾配をもって下がっている。調査区東半は縄文時代後期以来の窪地があり、弥生時代前期段階（11層上面）にもたわみ状の地形はのこっている。その後、次第に埋没していったとしても、わずかなたわみがのこっていたことも考えられるので、西から東に下がる勾配を有する溝は、この窪地の影響を受けたものといえるかもしれない。一方、古墳時代後期の溝である溝③は東から西に下がる勾配を有する溝である。この傾斜方向の違いが溝の時期差を示している可能性もある。今後の整理作業の中で検討を加えていきたい。

古代（図５）

古代の遺構としては、並行する２条の溝と、溝に挟まれた高まり部分で構成される道路状遺構を確認した。この高まり部分が通路で、両脇の溝は側溝と考えられる。道路は東西に直線的に延びるものと、調査区西半部における南北方向の道路が連接し、三叉路を形成している（以下、記載の便宜上「南北道路」、「東西道路（東）」、「東西道路（西）」と呼称する）。

道路状遺構の規模は南北道路と東西道路では大きく異なる。両側縁の溝自体が削平を受けていることや、歪みをもつものであり、どの部分で計測するかで規模は異なるが、溝の芯々間で計測すると、南北道路は約４～4.5m、三叉路連接点より西側の東西道路（西）は約2.5～３m、東側の東西道路（東）は約1.5～２mとなる。

また、東西道路（東）と南北道路はほぼ直線的に走向しているが、東西道路（西）は東西道路（東）よりも南側に位置しており、連接点を境とする東西道路の西と東ではズレが生じる結果となっている。

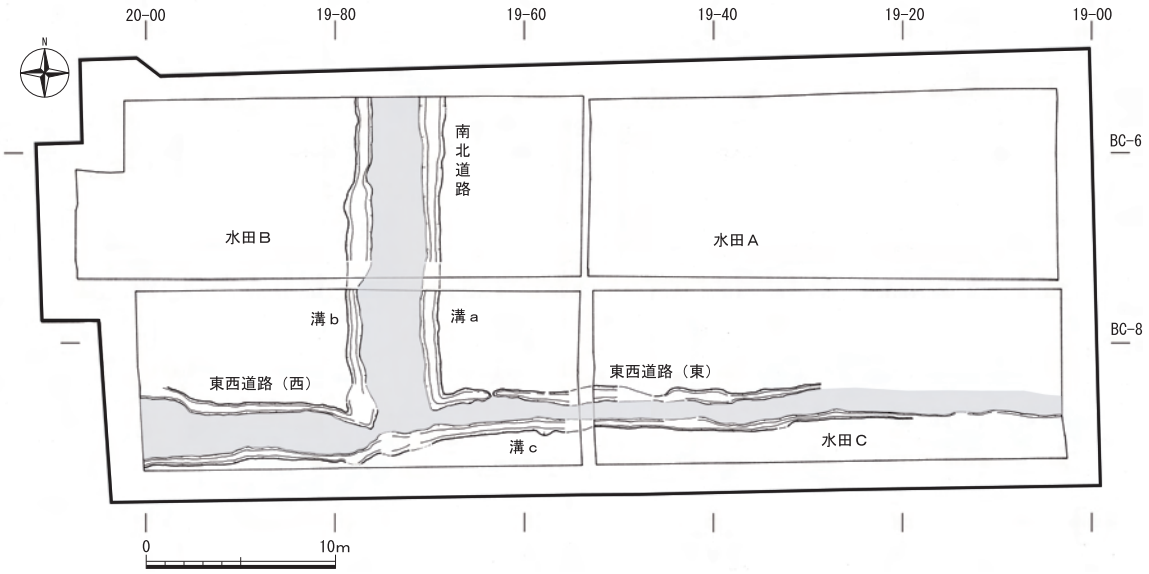


図５　古代遺構全体図（縮尺１/400）

溝の底面の標高をみると、溝ａ・ｂはともに南北方向では北から南へ傾斜するが、東西方向ではほぼ水平である。溝ｃは東から西へ下がる傾斜をもっている。これらの溝の主たる機能が周囲からの水の浸透を防ぎ、路面を乾燥化させることにあったとしても、排水機能をになう場面が生じることも予想される。しかし、暗渠や通路を横断する水路は確認されず、どのような方法で排水を行ったかは明らかにしえない。なお、出土遺物は少ないものの、溝ａから10世紀頃の須恵器杯底部が出土している。

道路状遺構によって区画された水田面の標高は下位の地形の影響を受けている。水田Aでは、調査区東半中央部が最も低く、調査区西半北側の南北道路状遺構沿いが最も高い。南北道路状遺構の西側の水田Bについても、北東部分が最も高く、放射状に緩く下がっている。水田Cは確認した範囲が狭く、地形の細部は詳らかではないが、やはり下層の窪地部の影響を受けており、19-20～19-40ライン間はやや低くなっている。

今回検出した道路状遺構は岡山平野における条里制の推定地割の位置に合致しており、岡山平野における条里制の施行が古代まで遡ることを示すものである。その場合、南北区画は坪境に、東西区画は里境となる。条里制では坪よりも里の方が上位の単位であり、里境区画の方が大規模であると想像するところであるが、本調査区でのあり方はそれとは異なる。なお、本調査区で確認した東西方向道路状遺構よりも３町北には幅約10～12mの東西方向の大規模な坪境溝が掘削されている。区画の明示という意味もあるが、それぞれの区画にもっとも合理的な機能をもたせることを意図した結果、里境よりも坪境の区画の方が大規模なものとなったのかもしれない。

中世・近世

中世の遺構としては、８層上面で鋤溝と考えられる浅い耕作痕を多数検出した。耕作痕は調査区中央の19－40ライン付近を境に、西は南北方向に、東は東西方向に掘削されたものであった。溝・畦畔等の明瞭な区画施設はみられなかったが、この耕作痕の方向が分かれる境界が何らかの土地の区画境を表示している可能性がある。ただし、古代の段階の南北方向の区画よりも東に位置することには注意が必要であろう。

近世の遺構としては、近代まで踏襲される東西方向の溝と、溝に造りつけられた水門、水門のそばに設けられた木枠入りの水桶状の土坑と、耕作地へと続く細い溝数条を検出した。先述したとおり、東西方向の溝は、本調査区の東約200mに位置する事務局本部棟調査地点で確認した東西溝と連接する条里の区画溝とみられる。

上記の内容は現時点における暫定的なものであり、正式な内容は本報告によるものとする。　　（野崎貴博）

第２節　立会調査の概要

１．調査の実施状況

津島地区における2007年度立会調査の実施件数は、14件を数える。このうち、中世層以下の土層・遺構を確認した調査が３件ある。すなわち、公共下水道接続工事＜調査番号４＞と総合研究棟Ⅲ期改修に関連する工事の一部＜調査番号８・10＞、そして給水配管引き込み工事（推進工事）＜調査番号13＞である。以下では、これらの調査成果について報告する。　（光本　順）

２．公共下水道接続工事（理学部ほか）：BA12区　＜調査番号４＞

⑴　調査地点の位置と経過

調査地点は津島キャンパス西門の北側である。守衛所の向かい側に設置されている公共下水枡への接続工事に伴うもので、南北方向の管路幅0.7m、長さ５m、東西方向の管路幅0.7m、長さ10m、新設枡（1.9×2.0m）一カ所が調査対象であった（図６）。掘削深度は東西方向の管路で、道路面から1.7～1.8m、南北方向の管路で道路面から1.85m、枡部分で道路面から2.2mである。管路部分では「黒色土」層まで、枡部分では基盤層まで掘削が及んだ。調査期間は2007年８月20日～22日である。以下に概要を記述する。

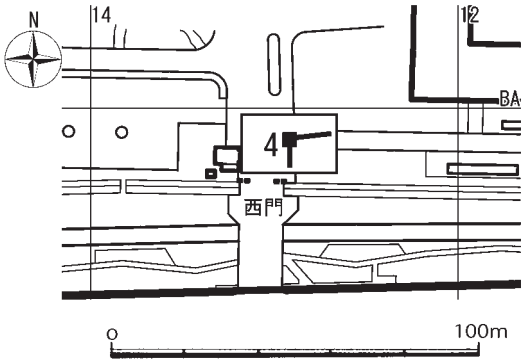


図６　調査地点の位置（縮尺１/2,000）

⑵　調査の成果

ａ．層序と地形（図７）

本調査地点では造成土以下基盤層まで11層を確認した。各層の時期については出土遺物がなく、周辺の調査成果から推定している。

１層は造成土である。陸軍による造成土及び岡山大学設立後の造成土である。２層は近代の耕作土層である。灰色粘質土で鉄分・マンガンを含む。３～５層は近世の耕作土層である。３層はマンガンを多く含む黄褐色砂質土、４層は黄褐色砂質土、５層は褐色土である。６層は黄灰褐色砂質土で鉄分・マンガンを含む。７層は灰褐色砂質土で、鉄分・マンガンを含む。６・７層は中世の耕作土層と考えられる。８層は灰色粘質土で、マンガンを多く含む。古代の耕作土層と考えられる。９層は黄褐色粘質土で、鉄分を多く含む。古墳時代相当と考えられる。10層は黒褐色粘質土で、マンガンを多く含む。津島一帯で認められる「黒色土」層にあたる。時期としては縄文時代～弥生時代前期と考えられる。11層は黄褐色粘質土層で、鉄分を含む。基盤層と考えている。

11層段階の地形はGL－2.0mで、南北方向の傾斜は認められない。10層上面は東から西へ、南から北へと若干傾斜している。９層はＡ・Ｄ断面では傾斜が認められず、８層によって削平されている。８層以上では、Ｂ・Ｃ断面の間でやや高低差があるが、全体としては水平堆積である。

ｂ．遺構（図７）

溝１　２層上面で南北方向の溝を一条確認した。枡南壁（Ｂ断面）で溝東側の立ち上がりを確認したものである。これより以南の管路部分では、調査範囲が溝中に含まれている。西側の立ち上がりは確認できず、幅は不明である。確認できた深さは30cmで、溝の底はGL－1.1mを測る。造成土を埋土としている。出土遺物はない。造

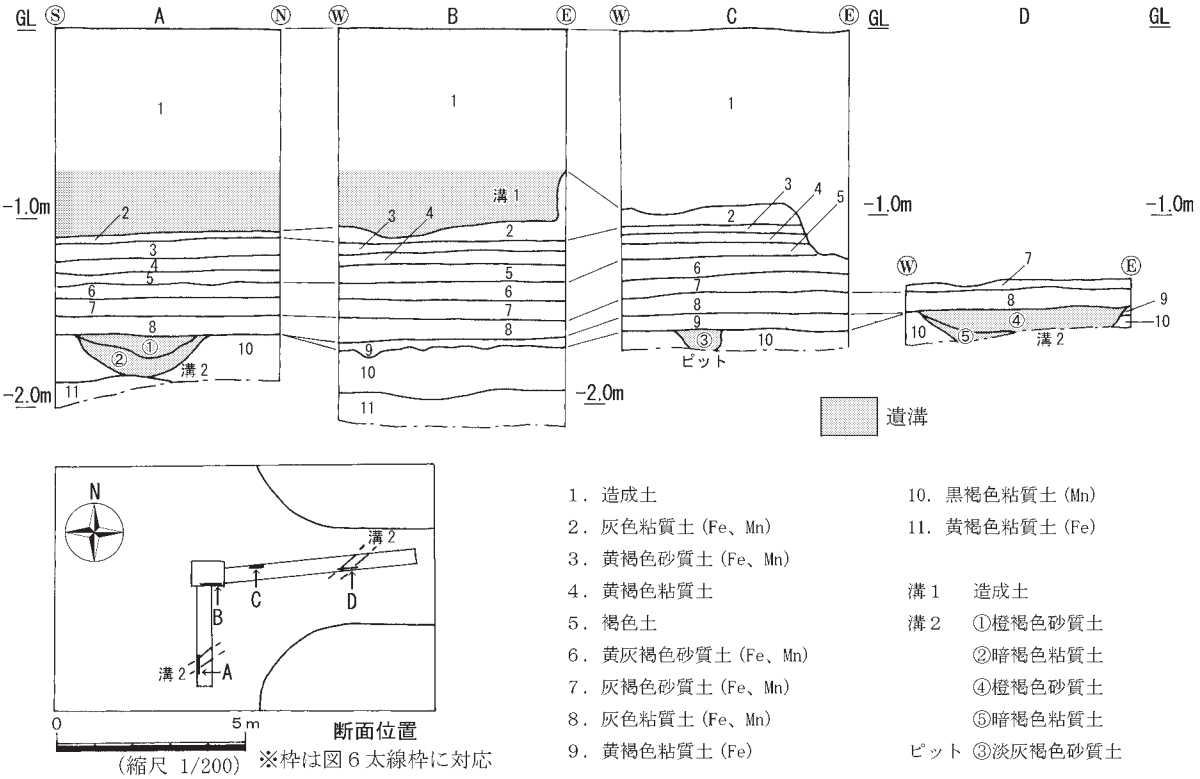


図７　土層断面図（縮尺１/40）

成直前まで機能していた溝であろう。近代の南北方向の溝であるため条里境との関係を検討してみたが、本調査地点は区画にはあたらない。

溝２　A･D断面で確認された北東から南西方向の溝である。９層上面での検出である。幅0.7～1.05m、深さ0.2ｍを測る。埋土は２層を確認した。出土遺物はないものの、層位関係から古墳時代の時期と考えられる。本地点とは少し距離があるが本地点の東約150ｍの第19次調査地点では弥生時代後期～古墳時代前半の北東－南西方向に走る溝群を検出している。微高地の裾部を走る溝であり、本地点のものもこれに類する溝と考えられる。

ピット１　10層上面で検出した（断面Ｃ）。径30cm、深さ10cmで、出土遺物はない。調査区内で組み合うものはなく、機能は不明である。時期としては弥生時代前期以降と考えられる。（岩崎志保）

３．総合研究棟Ⅲ期改修工事

・電気設備・外灯基礎及び管路工事

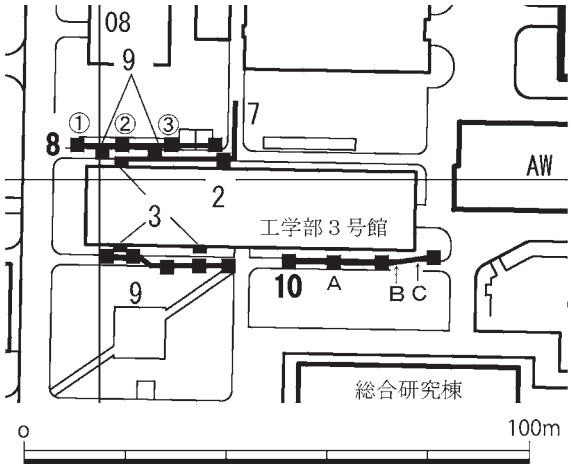
：AV・AX07・08区＜調査番号８＞

・外構枡・配管（東半部）工事

：AW07・08区＜調査番号10＞

(1)　調査地点の位置と経過

総合研究棟改修工事として、2007年11月～2008年１月にかけて、工学部３号館および２号館建物周辺の掘削工事が実施された。そのうち、掘削深度が比較的深かった



番号は表1の調査番号に対応、太字8・10：本調査地点

図８　調査地点の位置（縮尺１/1,500）

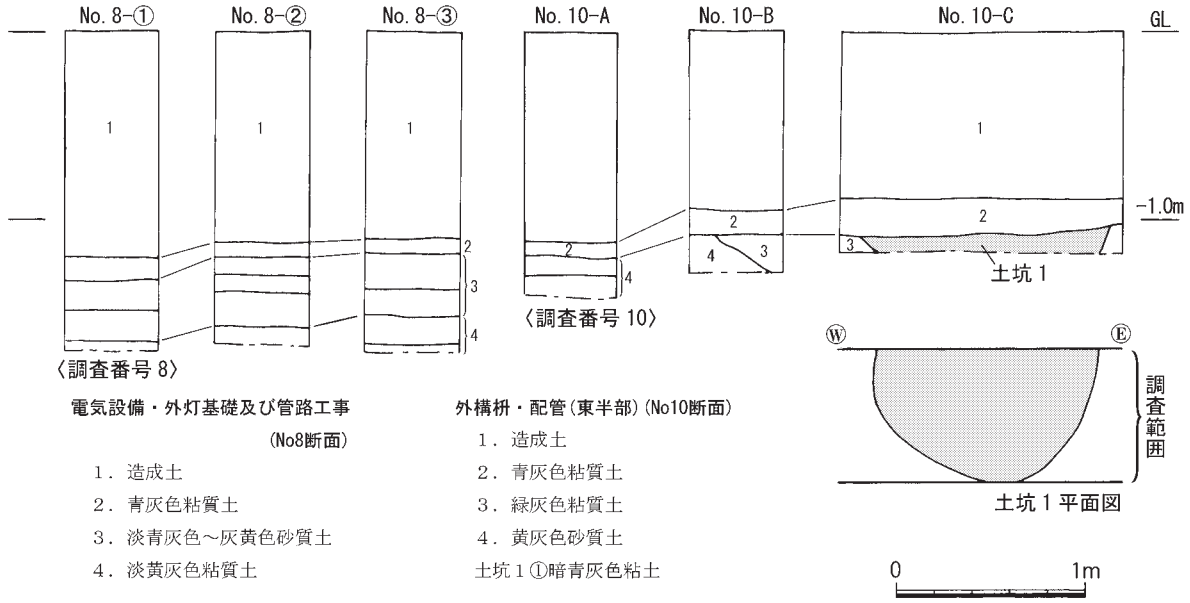


図９　土層柱状図（縮尺１/40）

のが、調査番号８の３号館北側の電気設備・外灯基礎及び管路工事と、同10の同館南側の外構枡・配管（東半部）である。前者の調査を11月16・19日、後者を12月25・27日、１月11日に実施した。

⑵　調査の成果

電気設備・外灯基礎及び管路工事では、中世層と考えられる土層（４層：淡黄灰色粘質土）を確認している。近世と考えられる３層（淡青灰色～灰黄色砂質土、Feの沈着で２・３枚に細分可能）が、その上に堆積する。

一方、外構枡・配管（東半部）では、近世土層の範疇に掘削が収まった。C地点では、近世土坑の一部を土層と平面で確認した。土坑の平面形は隅丸長方形となる可能性がある。埋土は暗青灰色粘土となり、遺物は出土していない。（光本）

４．インキュベーション施設外構配管工事：BA～BC20区　＜調査番号13＞

⑴　調査地点の位置と調査の経過

本調査地点は津島南地区の薬学部植物園西側に位置する（図10）。南東はインキュベーション施設新営地（津島岡大遺跡第30次調査）である。調査地点周辺では、第30次調査以外には、掘削深度の大きな工事に伴う調査は実施されていない。

本調査は新設されるインキュベーション施設への電気・ガス・水道および汚水の配管整備工事に伴う立会調査である。調査地点北側の⑤地点以北では、それぞれの設備の接続先により経路が三方に分かれる（西側経路：水道・ガス、中央経路：汚水、東側経路：電気）。⑤地点以南はこれらの配管を一系路に統合した集中経路となる。集中経路では４系統の管を並べて埋設するため、管路全体の幅は約２ｍと広くなる。しかし、掘削深度が浅い電気・ガス・水道配管を東半に、掘削深度の大きい汚水配管経路を西半約１ｍに寄せる構造であったため、近世以前の土層は集中経路西半部の掘削において確認された。

調査期間は2008年３月３～26日で、工事の進行に合わせて調査を実施した。以下、埋設設備ごとに掘削範囲と掘削深度をまとめておく。

汚水配管部分：インキュベーション施設から⑧地点までの掘削深度は約1.4mである。⑧地点以北では支障物の影響により、掘削深度が約1.7～2.4mとなる。掘削深度の大きい⑧地点から公共下水桝間の掘削については、深度が大きい桝部分（④～⑧地点）による土層の堆積状況確認後、管路の掘削を行った。

水道・ガス配管部分：水道管・ガス管は、市道に埋設された各既設管から新たな管を引き込む。その際、市道に並行する既存の用水路底より下位に管を通す必要から、用水路両脇（②・③地点）については現地表面から約2.3mの深さで掘削した。③－⑤間、⑤地点以南の管路については約１～1.4m前後の掘削である。なお、市道部分については岡山市教育委員会の指示にしたがい、掘削に立ち会ったうえ、記録をとった。

電気配管部分：経路の北端に引き込み用電柱を建柱するため、オーガによりφ50cm、深さ2.1mの掘り方を掘削した。管路の掘削深度は約1.2m前後、ハンドホールは約1.4mである。

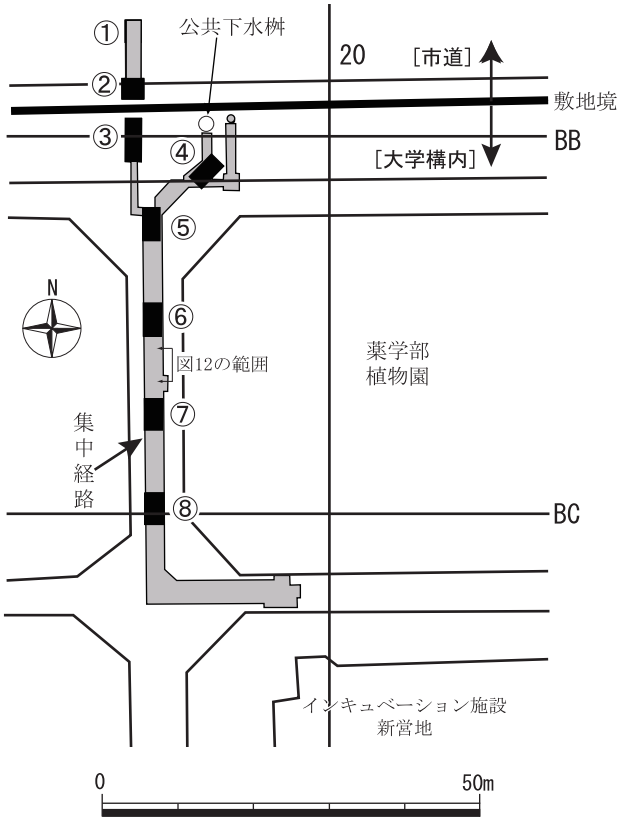


図10　調査地点と柱状図位置（縮尺１/1,000）

(2)　調査の概要

ａ．層序と地形（図11）

ここでは掘削深度が大きく、下層まで堆積状況が明らかとなった①～⑧地点、汚水配管管路部分の成果を中心に報告する。なお、本調査地点では遺物の出土がなく、各土層の時期は周辺の調査成果を参考にした。

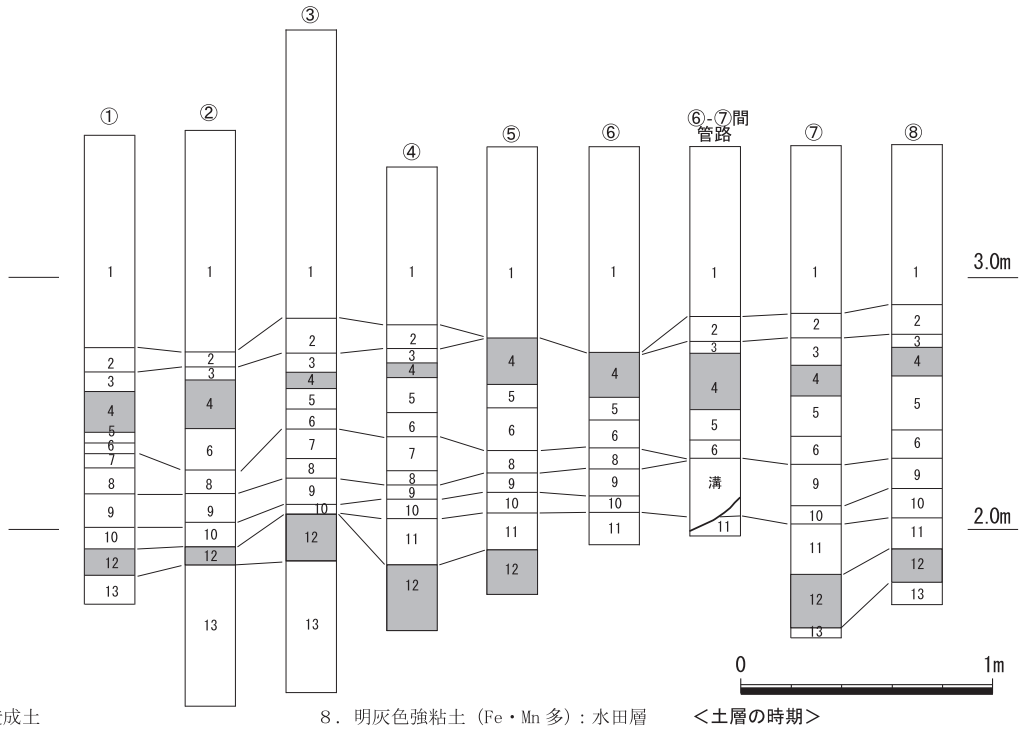
１層は陸軍駐屯地造成（1907年）以後の造成土である。上面の標高は約3.5～４m前後で高低差があるが、これは調査地点が道路や植え込みなどにあたっており、現在の土地利用の差を反映したものである。

２層は明灰褐色砂質土で、上面の標高は約2.7～2.9mであり、近代の耕作土と考えられる。

３層は明橙茶褐色砂質土で、上面の標高は約2.6～2.8mである。上面には鉄分の沈着が著しい。近世の耕作土と考えられる。４層は淡灰～明灰茶褐色粗砂で、上面の標高は約2.5～2.8mである。洪水砂とみられる粗砂層で、層の厚みに差があるものの、調査範囲のほぼ全域で確認した。本調査区の南東に位置するインキュベーション施設調査区（第30次調査）では近世と考えられる粗砂層が標高約2.6～2.7m、東に300mの延長線上にある創立五十周年記念館調査区（第27次調査）では中世の粗砂層が標高約2.9～3.1mで確認されている。本調査区では、後述するように、下層の５・６層が近世の土層である可能性があるため、本層も近世に所属する可能性を考えておきたい。５層は明灰茶褐色砂質土で、上面の標高は約2.4～2.6mである。６層は明灰橙茶褐色弱粘質土で、上面の標高は2.35～2.5mである。津島地区における他地点の状況をみると、中世に所属する土層は灰白色粘質土が主体的である。土質から判断すると、５・６層は近世の土層である可能性がある。

７層は明橙灰白色粘質土～粘土で、上面の標高は約2.4mである。鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しい。８層は明灰色強粘土で、上面の標高は約2.15～2.3mである。本層も鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しい。いずれも中世の水田層と考えられる。

９層は暗灰色強粘土で、上面の標高は約2.2～2.3mである。鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しく、水田層と



１．造成土
２．明灰褐色砂質土
３．明橙茶褐色砂質土（上面 Fe 多）
４．淡灰～明灰茶褐色粗砂：洪水砂
５．明灰茶褐色砂質土
６．明灰橙茶褐色弱粘質土（炭化物片）
７．明橙灰白色粘質土
～粘土（Fe・Mn 多）：水田層
８．明灰色強粘土（Fe・Mn 多）：水田層
９．暗灰色強粘土（Fe・Mn 多）：水田層
10．暗灰～暗灰褐色強粘土（Fe・Mn 多）
11．暗灰茶褐色粘土（Fe・Mn 多）
12．暗褐色粘質土
13．明黄褐色～明灰茶褐色砂質土

＜土層の時期＞
２層　　：近代
３～４層：近世
５～６層：近世？
７～８層：中世
９層　　：古代
10 層：弥生時代～古墳時代
11 層：弥生時代～古墳時代
12 層：弥生時代早期
～弥生時代前期
13 層：縄文時代後期

図11　土層柱状図（縮尺 1 /30）

考えられる。南東に近接する第30次調査地点でも中世水田層下に灰色粘質土の古代層を確認しており、本層も古代に属する可能性が高い。

10層は暗灰～暗灰褐色強粘土で、上面の標高は約2.0～2.15mである。鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しく、水田層と考えられる。11層は暗灰茶褐色粘土で、上面の標高は約2.0～2.1mである。調査区北側では確認されなかった。鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しく、水田層と考えられる。10・11層については、第30次調査地点では対応する土層を特定できない。ここでは両層を弥生時代～古墳時代の土層と考えておきたい。

12層は暗褐色粘質土で、上面の標高は約1.8～2.05mである。津島地区では「黒色土」と呼んでいる鍵層であり、上面が弥生時代前期にあたる。掘削深度の浅い⑥地点、⑥－⑦地点間管路では確認されなかった。

13層は明黄褐色～明灰茶褐色砂質土で、上面の標高は約1.6～1.9mである。縄文時代後期の基盤層と考えられる。掘削深度の大きい②、③、⑦、⑧地点で確認した。

地形　縄文時代後期の13層段階では、北側の②、③地点では標高1.8～1.9m前後、南側の⑧地点では標高約1.8mである。なお、南東の第30次調査地点では、標高約2.1m前後で微高地が広がっている状況が確認されており、⑧地点から南に向かってさらに高まっていくと推測される。④地点から⑥－⑦間管路地点では13層は確認されていないが、⑤地点では掘削底面の標高1.76mで12層が確認されるため、本調査範囲のうち③地点以南は窪地状に低くなっているとみられる。

12層段階では、③地点が標高約2.0mでもっとも高く、⑦地点が標高約1.83mでもっとも低い。③地点以北では12層上に10層が確認されること、下位の13層が高い位置で確認され、本来は微高地状を呈していたと推測される

ことから、11層以下が削平されている可能性も想起される。その場合、①・②地点では、12層は本来③地点で確認された標高約２ｍ程度の高さを有していたことが想定できよう。また、調査区南側では⑧地点で標高約1.9mであるが、第30次調査地点西側では標高2.2m前後で確認されており、13層同様、南に向かって高まることが想定される。

11層は、④地点以南で確認しているが、上面の標高が約2.0～2.1ｍでほぼ水平となる。この段階で調査区南半では12層段階の起伏がほぼ解消されている。

なお、12層上に10層が形成されている調査区北側の①～③地点については、11層形成後、土地の改変等により、11層と12層の一部が削平をうけた可能性があることは先述した。①、②地点の12層上面の標高は約1.9ｍで、ほぼ水平な面を形成している。③地点では約2.1ｍとなり、これは④地点以南の11層上面の標高にほぼ合致しており、③地点以南に水平な面が形成されたことを示す。したがって、10層形成段階に②、③地点間を境とする段差が作出されていたこととなる。この南北の段差は近代にいたるまで踏襲される。

ｂ．遺構（図12）

⑥－⑦地点間管路で６・８層から掘削された溝をそれぞれ１条ずつ確認した。調査範囲の東壁断面で確認された溝はほぼ同じ位置で西壁にも確認できたため、東西方向の溝とみられる。溝①は８層から掘削されており、幅約2.2m、深さ約0.35mをはかる。底面の標高は1.94mである。埋土は明橙～灰茶褐色砂で、下方にむかって砂の粒子は粗くなる。底面の粗砂層では鉄分の沈着が顕著にみられる。溝②は６層から掘削されており、幅約1.3m、深さ約0.2mをはかる。いずれも遺物は出土していないが、土層から溝①は中世、溝②は近世に属する可能性が高いとみられる。そのほかに遺構は確認されず、本調査地点は遺構・遺物の稀薄な地点といえる。

⑶　まとめ

津島南地区西半部では、これまで本調査区の南の第８・16・30次調査のほか、東約250～300ｍの地点では２件の発掘調査（第26・27次調査）、西約350ｍの地点で国際交流会館新営にともなう試掘調査を実施している。南・東側では、微高地と谷によって起伏のある地形が形成されていることが確認され、遺構・遺物の密度は津島地区北東の密集域に比して高くはないものの、縄文時代以降、各時期の遺構・遺物を確認している。それに対して西の試掘地点では中世層よりも下位は湿地状の堆積であり、遺構・遺物が非常に稀薄な状態である。今回の調査はこれまで調査が実施されてきた地点のほぼ中間地点を南北約80ｍにわたって掘削したこととなる。

その結果、縄文時代後期～弥生時代前期までは微高地と低地で形成される起伏のある地形が展開すること、古墳時代から古代にかけて土地の改変が行われていること、近世の洪水砂の広がりが確認されたこと、遺構・遺物

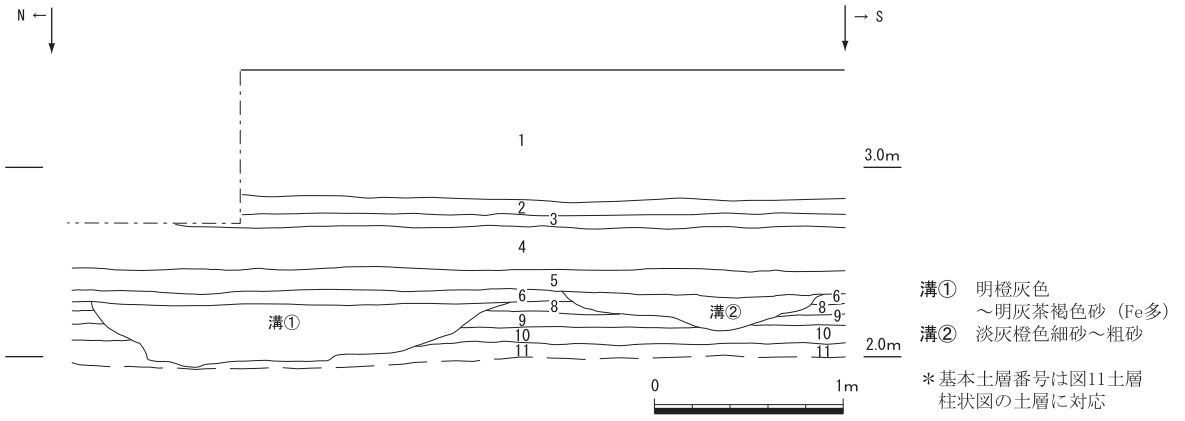


図12　⑥－⑦地点間土層断面図（縮尺１/40）

の密度は稀薄ではあるものの皆無ではないこと、など、旧地形の復元と土地利用の状況、遺構・遺物の疎密を知ることができた。

また、津島南地区西側で確認された湿地状の地形の東への広がりを本調査地点よりも西側に想定することができるようになったことは津島岡大遺跡の西側の範囲をとらえるうえで重要である。　（野崎）

表１　2007年度津島地区調査一覧

番号	種類	調査地区	構内座標	所属	調　査　名　称	調査期間	掘削深度（GL-m）	内　容
1	発掘	津島南	BE19･20	イ	インキュベーション施設新営に伴う発掘調査	8.1～12.17	2.0～2.5	縄文～近代の遺構・遺物、古代の道路状遺構、弥生～古墳の溝
2	立会	津島北	AV07	工	総合研究棟Ⅲ期改修工事：配管工事	8.8	0.4	既設工事内
3	立会	津島北	AW･AX07	工	総合研究棟Ⅲ期改修工事：外部PS基礎部分	8.20･21	0.6～0.75	造成土内
4	立会	津島北	BA12	理他	公共下水道接続工事（理学部他）	8.20～22	2	GL-1.6mで黒色土確認、弥生時代の溝
5	立会	津島北	AU･AW08	工	総合研究棟Ⅲ期改修工事：建柱	8.24	0.8、1.9～2.0	残丘部分：GL-0.8m、下面に灰青色砂礫層確認（丘形成前の土層か）。他２箇所：GL-1.9～2.0m、近代層確認
6	立会	津島北	AW13	図	中央図書館耐震改修工事：建柱	10.22	0.75～1.35	既設工事内および一部近代層
7	立会	津島北	AV07、AX07･08	工	総合研究棟Ⅲ期改修：機械設備工事・配管替え	11.9･12	0.7	造成土内
8	立会	津島北	AV･AX07･08	工	総合研究棟Ⅲ期改修：電気設備・外灯基礎及び管路掘削工事	11.16･19	1.4～1.7	近世～中世層確認
9	立会	津島北	AW07	工	総合研究棟Ⅲ期改修：外構枡・配管（西半部）	11.19･26･28	0.8	造成土内
10	立会	津島北	AW07･08	工	総合研究棟Ⅲ期改修：外構枡・配管（東半部）	12.25･27、08.1.11	1.1～1.4	近世層確認、土坑１基
11	立会	津島南	AZ～BF18	イ	インキュベーション施設仮設電気引き込み工事	08.2.4	1	近代層確認
12	立会	津島南	BD18	農･薬	遺伝子実験施設アース板修理工事	08.2.29	1.65	既設工事内
13	立会	津島南	BA～BC20		給水配管引き込み工事（推進工事）	08.3.3～26	1.2～2.4	縄文時代～近代の土層確認、中世と近世の溝各１条
14	立会	津島南	BB～BG18、BC･BE17、BE16	薬	ガス配管改修工事	08.3.7～26	0.8～1.3	造成土内～一部近世層まで掘削

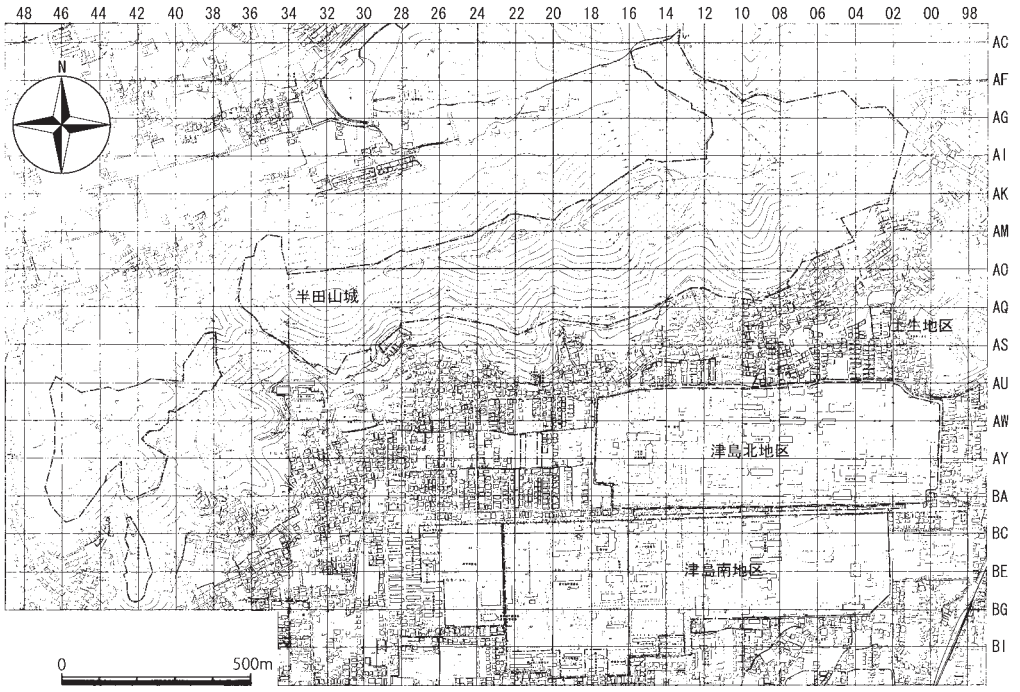


図13　津島地区全体図（縮尺１/20,000）

－土生地区－（縮尺１/3,000）

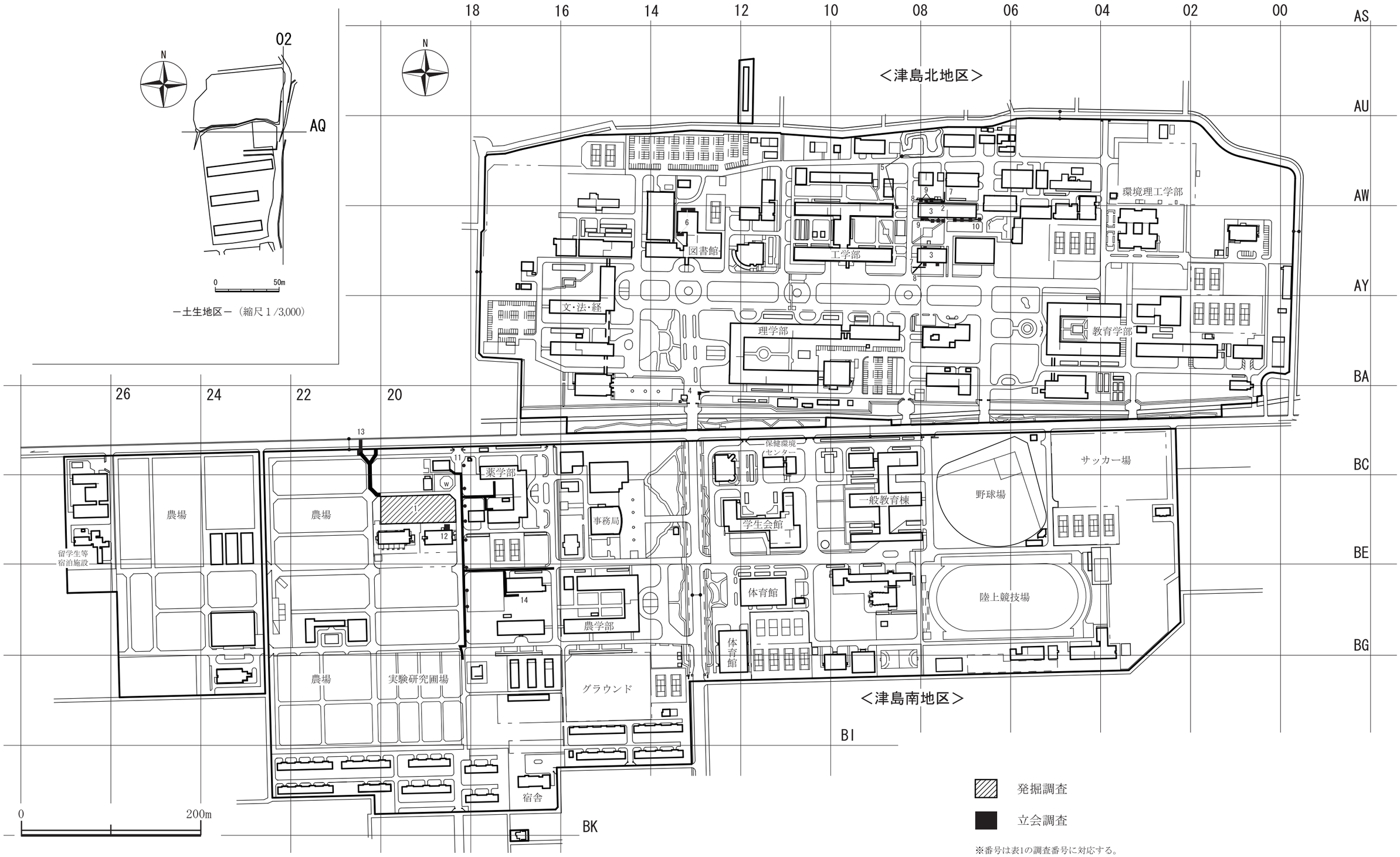


図14　2007年度の調査地点【1】－津島地区－（縮尺１/4,000）